

長井信一著

『国際関係論の軌跡——文明接触の座標から——』

世界思想社 1997年 ix + 187 + iii pp.

かわむら こういち  
川村 晃一

本書は、F・L・シューマンの名著『国際政治』（東京大学出版会 1973年）の訳者でもある長井教授が、過去30年間にわたり発表してきた国際政治理論に関する諸論文を、加筆修正を行った上でまとめたものである。

著者が、国際政治学に加えて、さらには比較政治学、地域研究と研究領域を広げるなかで達した結論は、「広義の国際関係論に含まれる上記3分野の『文明接触史』的総合アプローチ」の必要性であった。つまり、ヨーロッパ的文明社会の国際システムである「西欧的国際政治体系」が、アジア、アフリカといった非西欧地域に拡大していくとき、当該地域の文明・文化との接触が不可避的に起こる。その時、非西欧地域の文化と、その一側面としての「政治上の態度と行動様式」がどのように変容するのか、または変容しないのかという観点から途上地域を把握する必要がある、というのが著者の主張である。

著者のいう文明接触史的総合アプローチは、シューマンにはじまる「国際関係論における文明・文化的アプローチ」に大きく影響されている。著者によれば、シューマンの提唱した「西欧的国際政治体系」の概念は、きわめて文明的性格が強い。なぜなら、今日の国際政治体系は、地球を覆うまでに拡大したヨーロッパ文明社会における国際システムであり、それゆえ、西欧キリスト教世界の文化に起源をもつからである。これは、国際政治の行動主体である国家は、ある一定の普遍的、反復的、斉一的な態度をとると理論化したハンス・モーゲンソーの立場とは対照的である。しかし、著者によれば、このように一般化されたモーゲンソーの国際体系概念では、非ヨーロッパ地域での新興国の独立や、その後の「南北問題」の発生を把握することはできない。その意

味で、人類史上にはさまざまな国際体系が存在していたことを前提としているシューマンの「西欧的国際政治体系」概念は、より広い理論的射程を提供しているというのである。

文明接触史的総合アプローチとは、具体的には、国際関係論、比較政治学、地域研究が統合されたものである。著者の目指す理論的統合の意義は、研究対象社会の特性を全体的に把握する地域研究によって、当該社会の文化の内在的特質と特殊性が理解される一方、比較的視座を用いることによって、文化の比較可能性という視点で分析に取り込まれるところにある。さらには、国際政治体系と当該社会の相互連関という視点を取り入れられることにより、個別社会の文化接触・文化変容と政治経済的側面の問題が解明されるという。

たしかに、近年の政治学一般の流れの中でも、文化論的アプローチの有効性が再び主張されるようになってきており、著者のいう国際関係論における文明接触史的総合アプローチは、それを先取りしていたといえる。しかし、本書の中で繰り返されている「文明接触史的総合アプローチ」とは具体的にいかなるアプローチなのか、はっきりとは示されていない。他のアプローチと比較しての優位点はどこにあるのか、このアプローチからはどのような仮説、どのような理論が導き出されるのか、著者によるさらなる説明が期待される。

また、著者のいう国際政治学、比較政治学、地域研究の3者の理論的統合の試みも、具体的にはどのような形で理論化が実現されるのか明示されていない。近年、国際政治学と比較政治学の統合の必要性が学界でも認識されるようになってきた。その意味で、著者の示している研究の方向性は時代を先取りしたものではあった。しかし、理論統合の必要性を叫びながら、それ以上のものを著者は提示していない。分析対象や方法の異なる3つの理論分野の中でのどの枠組みを、どのように整合的に結合させるべきだと著者は考えているのであろうか。

以上の2点については、さらなる理論的精緻化が望まれるところである。

（アジア経済研究所地域研究第1部）